

●全体講評

今回のコンテストは東日本大震災の発災直後から公募を開始しました。この巨大災害は大津波や原子力災害をも引き起こし、多くの人命を奪い社会全体に暗い影を落としました。こうした状況の中でコンテストに応募いただいた方々は、ドラマを超える現実を目の当たりにして、どこまで想定し、何をテーマとしてシナリオを描くべきか、大いに悩まれたことと思われま

す。応募作品のテーマとしては、災害発生時の災害対応を描いたものに加え、地域の防災力を見直す平時の話し合いの過程をドラマにしたものがありました。このドラマづくりを通じた地域防災の取り組みは、住民が主体となり、地域の災害特性を調べ、地域固有の対策を検討し、それらの対策が災害時に実質的に機能するために、地域防災の見直しを図り、かつ、地域社会の協力関係を築いてゆくことを目的としています。

そのためには、行政を含め地域の様々な団体と意見交換を通じて様々な情報や知恵、知見を集め統合することが求められます。関係者との情報交換が充実している団体がある一方で、制作過程で地域との意見交換が全く行われないグループも見受けられました。今年度は、被災地内外を問わず、防災行政の担当者の方々が、災害対応や防災計画、防災対策の抜本的な見直しに追われたこともあり、気軽に相談できる雰囲気ではなかったかもしれません。住民や生活者の目線で地域の防災対策を見直すことが大事になりますが、加えて、科学的な知識や防災対策の専門的な知見も活用することが望まれます。

コンテストでは、できたドラマを活用する取り組みも評価の対象としています。さらに、応募がドラマづくりのゴールではありません。今後、できたドラマを活用することで、地域の課題や資源を洗い出し、また、地域のより多くの関係者を巻き込み災害時に役立つ絆づくりが促進されることが期待されます。特に、生徒や学生の応募者の方々は、ドラマづくりを楽しんでいただき、その上で、学校内に留まらず、ドラマづくりの過程で、または、出来たドラマを活用して地域と積極的にかかわり、地域の防災をリードできれば、とても素敵なことだと思われま

す。応募作品の中には、事実関係を丹念に調べて一見すると防災マニュアルのような作品もありました。しかし、ドラマは正解を記述したマニュアルではありませんので、敢えて問題提起につながるような矛盾を孕む内容を描くことで、より地域の防災意識が啓発されるといったドラマづくりも期待されます。地域防災の取り組みはまじめな取り組みですが、感動したり楽しくないと誰も聞いてくれません。このまじめさと楽しさのバランスをどうとるかがみなさんの腕の見せ所です。今後とも、ぜひ、新たなドラマづくりにチャレンジしてください。

第2回地域発防災ラジオドラマコンテスト 審査委員会（委員長：大森一樹）

<ドラマ部門>

最優秀賞 2 作品、優秀賞 3 作品（うち審査委員特別賞 1）、奨励賞 4 作品

最優秀賞

●グループ名「かつと 2 号」（神奈川県横浜市）

タイトル「お助け隊、出動！」

高校生で構成されたお助け隊と地域の高齢者とのコミュニケーションを軸とした物語で、人々のしぐらみや葛藤という理性だけで解決できない部分を良く捉え、学生の地域貢献に向けた姿勢に踏み込んでいる点が評価できる。都市に多い高層マンションの独居老人に関する課題が巧みに表現されており、高校生によるお助け隊といった新たな地域活動の取り組みや、安心電話、AED など、災害時の具体的な対策が表現され、学生が民生委員と協力しながら高齢者などの要援護者を助ける内容は、今後の新たな地域防災活動につながることを期待される。

本ドラマで登場するお助け隊は、地域を巻き込めるたたき台として、平常時から災害時への発展性を内在し、災害時だけでなく平常時の社会活動としての活動が期待でき、当ドラマを土台に、防災資源としての高校生と、消防団や民生委員などの連携性、役割分担を見直すきっかけとなりえる。作成過程において、さまざまな地域関係者が関与している点も高く評価される。効果音の使い方、声優の話し方など、ドラマとしても完成度が高い。今後このドラマをきっかけにして、地域のさまざまな主体を巻き込んだ防災の見直しにつながることを期待したい

最優秀賞

●グループ名「倉敷市立味野中学校 ^{あじの}演劇部」（岡山県倉敷市）

タイトル「その夜、嵐は 2 つ来た！～僕の夏休みの宿題は…～」

7 年前の台風による高潮被害（2004 年の台風 16 号）を題材に、要援護者の助け合いのメッセージが伝わり、いろんな関係者がからみあった、地域特有の低い防災意識を自覚して作られた作品である。被害にあった人たちのユニークな人物像とセリフなど、中学生らしい生き生きとしたやり取りが多く、アイデアが感じられ、ラジオドラマとして面白い作品となっている。

現状では学校の演劇部の限定された関係者中心に制作されたドラマとなっているが、協力者としてコミュニティ FM 局、市役所関係者、地域の NPO などが関わっていることから、本ドラマの制作をきっかけとして、地域のさまざまな主体に問題意識を喚起させ、防災体制の見直しにつながってゆくことを期待したい。

審査委員特別賞

- グループ名「倉敷市立中庄なかしょう小学校 運営委員会」（岡山県倉敷市）

タイトル「今、ぼくに出来ること」

子どもたちの真摯な姿勢が好ましい。自然災害による被災経験の乏しい岡山の子供たちの被災地への思いが心地よく伝わる。大震災に対し、子供の目線から被災地の人の気持ちになって、自分たちにできることを考え、小学生の被災地支援、義捐金という社会の支え合いの心の大切さが表現されている。地域の防災意識の低さを理解し、これを巧みに表現しており、子どもの演技も優れている。小学生の被災地支援に対する自己中心的な社会を考える心、葛藤、災害経験に対する自然な反応など。子供らしい純粋さが表現されている。アドバイザーとして、市役所職員（防災担当者含む）や地元NPOも関与しており、今後地域内の平常時の絆づくりに発展していくことが期待される。

優秀賞

- グループ名「つくば市民大学「防災ラジオドラマを作ろう！」チーム」（茨城県つくば市）

タイトル「私たちに出来ること」

地域の祭りの最中に突然発生した地震に対し、災害時要援護者となる可能性の高い聴覚障害者の避難誘導に必要なコミュニケーション手段等を題材として、リアルに表現されており、祭りの危機管理やマニュアルなど、ドラマづくりの視点に、地域の特徴が巧みに表現されている。ドラマ制作過程における防災に関する各種資料の活用については優れているが、調査内容に比べるとややドラマ性が弱い点は否めない。今後はこれを地域のさまざまな防災の取り組みにつながる提案に発展させていくことに期待したい。

- グループ名「北海道札幌あさひがおか旭丘高等学校放送局」（北海道札幌市）

タイトル「防災☆お姉さん」

学校教育における防災教育を題材としてドラマを作ったところがユニークである。台本は現代高校生気質を反映して面白くできており、放送部が作成しただけにドラマとしての質は高い。ドラマづくりの過程における地域とのかかわりが乏しく、関係者の多様性にも限界があるものの、学生が主体となった防災教育への発展として、今後各地での教育素材として参考となることを評価した。

奨励賞

●グループ名「大阪国際大学放送部」（大阪府守口市ほか）

タイトル「震度3」

大学の周辺の地震リスクがどうなっているか、直接的な被害が生じることのできない「震度3」からでも災害のイメージが膨らませることができ、液状化現象など、地域の災害に対する危険性について調べる過程を通じて問題点に気づくなど、平時の地域防災が持っている課題を巧みにあぶりだすようにできている。表現はリアルであるもののドラマ性という点では今一步である。大学生らしい行動力を活かして、このドラマを軸に地域防災力向上につなげていく活動に発展していくことを期待したい。

●グループ名「^{みのお}箕面自由学園放送部防災課」（大阪府豊中市）

タイトル「避難中、緊急避難」

閉じ込められた側と助ける側の両面の内容が対照的に表現されドラマ性が高い。災害発生から98時間後に救出されるという状況は311の経験を参考にしたと思われるが、ドラマ性を高めるためにやや無理のある設定している感が否めない。一方でとっさの判断が招く危機も感じられ、防災面での物資の備蓄やメンテナンスの重要性など問題意識に対する提案については良い。この作品も学校での防災から、地域への防災に発展していくような活用方法を模索してもらいたい。

●グループ名「岡山県立玉島高等学校 放送同好会」（岡山県倉敷市）

タイトル「私の警報日記」

地域の防災について真面目に調査し、身近な台風の話題での床上浸水や助け合いの話がうまく表現されている。高校生らしい青春ドラマとして、ラブロマンスも盛り込まれ、エンターテインメントとしてのドラマ性は高いが、地域防災に対する示唆性については乏しい。防災での活用性や地域性が加えられ、より良い作品に仕上げていかれることに期待したい。

●グループ名「^{うじょうく}宇城久ドラマプラグイン」（京都府城陽市）

タイトル「日常をつなぐ防災」

防災に役立つ堅い内容と笑いの要素のバランスがうまくとれていて、聞きやすいドラマに仕上がっているものの、台本の棒読み感もあり、もっと自由にやっても良かったのではないかと思える。平時の話し合いで被害を想定し、地域の水害の経験者にも体験談を取材している点や、作品がすでに放送されているなど、制作活動を多くの人に知ってもらおうという姿勢が評価できる。作品としての完成度はまだまだだが、作品に対する批判を含めたコミュニケーションが生まれるなど、関係者が協力して議論し、完成していく防災ドラマとしての発展を期待したい。

＜台本部門＞

優秀賞4作品（最優秀賞 該当なし）

優秀賞

●グループ名「^{はっだい}初台保育園「父母の会」（東京都渋谷区）

タイトル「その時のママのために～首都直下型地震に備えて～」

3月11日の東日本大震災での実体験をベースに、首都直下地震時の妊娠中の奥さんの長距離帰宅や児童の保育園との引き渡し、父兄間の預かりなど、災害時要援護者に対するメッセージが明確で、夫婦の支え合いが描かれている。ドラマ的なストーリー性には乏しいが、災害時に地域に想定できる事態をきちんと踏まえたうえで、震災時になすべきことが盛り込まれ、見落としがちな視点をフォローした良い作品となっている。長距離の帰宅困難、事実関係の確認など、今後の地域関係者への問題提起につながる題材として、話し合いや防災訓練に活用することや、今後、同じ状況になった際、状況をイメージしながら実際の行動選択に役に立つようなものに発展することを期待したい。

●グループ名「^{すわちょう}諏訪町町内会」（茨城県常総市）

タイトル「諏訪町に自主防災組織をつくろう」

平時から防災について地域住民が問題意識をもって考えていることをドラマ化したもの。自主防災会の実際の組織化の過程を扱っており、議論をそのまま脚本にするという手法はユニークであり、自主防災組織の役割分担や連絡体制についていろいろな意見が出され、話し合われている。地域性が考慮された町の防災の考え方は分かりやすく、地域区分やプライバシー問題、連絡体制の実行可能性も実践的に表現されており、普遍的で有用な内容であるが、ドラマというよりも防災の教科書のような作品となっている点が惜しまれる。

●グループ名「^{みややま}宮山会」（大阪府豊中市）

タイトル「僕らは」

作品制作に多様なグループが関わって、災害時における学校周辺の延焼リスクを評価しながら学校から自宅までの帰宅シミュレーションがしっかり行われているなど、災害時の学校を舞台に現実的な問題把握が試みられ、校舎からの避難について丁寧に書かれている。一方でドラマ性には乏しく、防災性も掘り下げが足りない。地震後の避難に関するポイントを、生徒自ら考えて話し合っている所が表現されているが、具体例があるとより良い作品になると考えられ、今後の進展に期待する。

●グループ名「一緒に災害から身を守ろう」

タイトル「午前7時時点」（大阪府豊中市）

いかにも大阪らしい語り口であり、母の扱いが面白く漫才の台本を読んでいるようで面白い作品ではある。また、天気マニアの母と台風災害の理解の演出が興味を引き、大阪と台風に関する詳細な情報がうまく盛り込まれ情報の量も豊富である。ただ、公的機関がよく作るようなマニュアル的な教材

のような印象が強く、防災ラジオドラマとしてはパターン化されたものの一つという印象がある。地域関係者への広がりも乏しいので、これをきっかけにしてより多くの地域主体との関係を生み出していってほしい。